



【鍋島賞（最優秀演題賞）】

浅岡 希美

京都大学大学院医学研究科システム神経薬理学

研究課題、タイトル

Region-specific plastic changes in the prefrontal cortex drive compulsive task performance

コメント

このたび、2024年5月23日から26日にかけて東京で開催されました、第35回国際神経精神薬理学会（35th World Congress of Neuropsychopharmacology, CINP2024）にてポスター発表を致しました。JSNP Excellent Presentation Award for CINP2024および鍋島賞にご選出いただき、大変光栄で身の引き締まる思いです。この場をお借りして、選考委員の先生方並びに学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。また、研究の遂行にあたって、日頃よりご指導をいただいております先生方、研究室員の皆様にも感謝申し上げます。

学会中は、基礎分野、臨床分野ともに数多くの発表が行われ、日ごろマウスと向き合っていたばかりの私にとって、普段は直接議論する機会の少ない臨床分野の知見を吸収する良い機会となりました。大会初日のMeet the Expertセッションでは、講演の内容に関して会場全体を巻き込んだディスカッションが行われるという形式で臨床上の問題に対する議論が行われておりました。臨床現場での意思決定過程を伺えたことに加え、国内学会の、ある種厳粛な雰囲気とは異なる活発さに触れることができたこともよい経験になったと思います。

私自身は、強迫的な行動様式が形成される神経メカニズムについて、ポスター発表を行いました。最終日の発表でしたので、お疲れの方も多いのでは？と心配したりもいたしましたが、全くの杞憂で、日本・海外、基礎・臨床の多様な背景を持つ研究者の方々に足を運んでいただけました。周りのポスター発表者の方々とも互いに議論したりする間に、あっという間にポスター撤収の時間となったように感じます。ディスカッションでは自分の盲点を突くような質問をいただいたり、異なる分野の研究への発展性が見いだせたりと、今後の研究の進展に非常に有意義な時間となりました。

今回の受賞を励みに、これからも研鑽を重ね、神経精神薬理学分野の発展に貢献できるよう精進して参りたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



浅田 遼

福岡大学医学部精神医学教室

研究課題、タイトル

The high rate of the adherence to pharmacotherapy guideline in recovery and remission in patients with schizophrenia: A cross-sectional study

コメント

2024年5月23日～5月26日に東京で開催された第35回国際神経精神薬理学会（35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology）に参加し、JSNP Excellent Presentation Award for CINPを受賞させていただきました。私にとって初の国際学会での発表で、このような賞を受賞させていただき嬉しく思っております。また、日本でのCINP開催は第17回京都大会以来ということで、初日から非常に盛り上がっていました。国内外多くの研究者が参加し、特にアジア系の参加者の多さに驚きました。次回の開催地はメルボルンということもあり、世界の中でもアジアが注目されていると感じました。

今回は“The high rate of the adherence to pharmacotherapy guideline in recovery and remission in patients with schizophrenia: A cross-sectional study”というタイトルでポスター発表を行い、本発表では統合失調症薬物療法ガイドラインの遵守度と統合失調症のリカバリーや症候学的寛解などについて検討を行いました。発表当日は会場で多くの先生とディスカッションができ、非常に有意義な時間となりました。私は普段から統合失調症のリカバリーに関連した神経認知機能、薬物療法やバイオマーカーに関する研究をしており、研究の成果を患者さんに届けられるよう、より一層邁進していきたいと思います。

末筆ではございますが、選考委員の先生方、学会関係者や運営スタッフの皆様には深く御礼申し上げます。また、普段から研究をサポートいただいている職場の皆様にも感謝申し上げます。今後も神経精神薬理領域の発展に貢献できるよう精進して参りたいと思います。



荒木田 優輝

富山大学薬学部創薬科学科薬物治療学研究室

研究課題、タイトル

Reduction of Teneurin-4 in the prefrontal cortex induces depressive behaviors in mice

コメント

この度、2024年5月に開催されました35th World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicumに参加し、上記演題に対してJSNP Excellent Presentation Award for CINPをいただきました。今回、このような大変名誉ある賞をいただき大変光栄に存じます。この場をお借りして、選考委員の先生方および学会関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。

今回、初めて国際学会に参加し、著名な先生方の講演を聞く中で最先端の研究技術や知見に触れることができ、非常貴重な機会となりました。

私は「うつ病の新規発症メカニズムの解明」を目的として研究を行ってきました。うつ病患者数は年々増加しており、それに伴う有効な治療薬の需要も年々増加しています。一方現状の治療薬ではうつ病患者の約3割が抵抗性を示すことが報告されており、既存の薬理作用に留まらない新規抗うつ薬の研究開発が急務です。うつ病患者の前頭前皮質の領域において、容積減少が報告されています。また、本研究で着目した分子が多く精神疾患に関与していることも報告されています。しかし、うつ病における前頭前皮質と当該分子の関係性は明らかにされていません。私が発表した研究では、当該分子のノックダウンによって誘発されたうつ様行動は、主にドパミン・セロトニン受容体に作用する薬物を投与することで回復することを明らかにしました。本研究がうつ病の新たな治療戦略に繋がることを願っております。

今回の受賞を励みに、さらに研究を進め、神経精神薬理学の発展に貢献できるよう精進して参ります。

最後になりましたが、私が楽しく研究活動を行うことを献身的に支えてくださっている当研究室教授の新田淳美先生、特命助教授の横瀬淳先生、助教授の矢野結友先生、ならびに研究室の皆さまに深く感謝申し上げます。



石川 修平

北海道大学病院精神科神経科

研究課題、タイトル

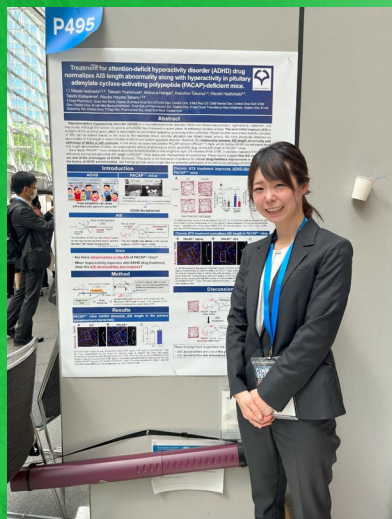
Identification of predictors for antipsychotic-induced weight gain: a nationwide cohort study

コメント

北海道大学病院精神科神経科に所属しております石川修平と申します。この度、2024年5月23日から26日に開催されました第35回国際神経精神薬理学会世界大会（35th WORLD CONGRESS World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum : CINP2024）に参加いたしました。本会は日本神経精神薬理学会（JSNP）および日本臨床精神神経薬理学会（JSCNP）の合同年会と同時開催であり、私はCINP 2024にてポスター発表、JSNP/JSCNP合同年会にてシンポジウムでの講演をさせていただき、多くの先生方との議論を通じ、多くの刺激を得ることが出来ました。

今回、日本神経精神薬理学会より、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2024を頂いたことを大変光栄に思います。受賞対象となった研究は全国多施設共同の前向き観察研究であり、多くの先生方および当事者の皆様のご協力によって、実現した研究です。そのため、名誉ある本賞を頂けたのは、本研究へのご支援・ご協力をいただきました多くの先生および当事者の皆様、学会を運営して下さった皆様のお陰でございます。そのため、本研究がご評価いただけたことを大変嬉しく思います。この場をお借りして、心より厚く御礼申し上げます。

私は多くの精神神経疾患を対象に基礎・臨床研究を実施しております。本賞を糧に、医療の発展に繋がるエビデンスを創出できるよう日々精進致しますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



岩橋 美咲

大阪大学大学院歯学研究科 薬理学講座

研究課題、タイトル

Treatment for attention-deficit hyperactivity disorder (ADHD) drug normalizes AIS length abnormality along with hyperactivity in pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide (PACAP)-deficient mice

コメント

2024年5月23日 - 26日に東京にて開催されました第35回国際神経精神薬理学会（35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology）に参加し、ポスター発表をさせていただきました。今回のCINPは記念すべき日本開催であり、また私個人にとりましては記念すべき初国際学会でありました。恥ずかしながらこれまで国際学会での発表経験がなく、楽しみ半分不安半分、といった心持ちでしたが、Welcome Ceremonyで披露されたProf. Pierre Blier による気迫に溢れた“Karate Demonstration”が私の混沌とした心を引き締めつつも落ち着かせてくれたように思います。とても素晴らしい演武でした。

今回私は”Treatment for attention-deficit hyperactivity disorder (ADHD) drug normalizes AIS length abnormality along with hyperactivity in pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide (PACAP)-deficient mice.”のタイトルで発表させていただきました。ADHDモデルマウスにおける新規な解剖学的異常と行動異常を、薬によって同時に改善できたという点に、国内外の多くの先生方が興味を持って下さり、Discussion timeでは様々な視点から議論を交わして下さいました。昨年別の学会でポスター発表を聴きに来てくださった先生が、進捗を尋ねに来てくださったことも大変悦ばしい出来事でした。先生方から頂いたアドバイスは非常に勉強になることばかりで、今後の研究の方向性や展開について視野が広がったように思います。発表以外に関しても、国外から来られた研究者の方と日本文化について世間話を交わすなど、非常に有意義な国際学会となりました。一方、次回もCINPに是非参加して発表をと企む頭の隅で、今大会以上に英会話能力の強化が必要だと痛感しているところです。

末筆となりますが、今回JSNP Excellent Presentation Award for CINP2024を授与いただきましたことを大変嬉しく、そして光栄に存じます。受賞にあたり、ご指導頂きました先生方、また学会関係者の皆様にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。今後また新たな研究成果を手多くの先生方と熱く議論できますよう、そして神経精神薬理分野の発展に微力ながら貢献できますよう日々精進して参る所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



江崎 博仁

金沢大学大学院医薬保健総合研究科創薬科学専攻薬理学研究室

研究課題、タイトル

The medial prefrontal cortex exerts the nicotine-induced facilitation of object recognition memory encoding and retrieval in mice

コメント

この度、2024年5月23日から26日にかけて開催されました第35回国際神経精神薬理学会(35th CINP2024)に参加させていただきました。本大会は、私がオンサイトの国際学会に参加させていただく初めての経験となりましたが、世界中の著名な先生方のご講演を間近で拝聴することができ、また活発なディスカッションを交わすことができ、大変楽しい時間を過ごすことができました。本大会を開催するにあたり、多大なるご尽力いただきました諸先生方、また運営スタッフの皆様には厚く御礼申し上げます。また今回、栄誉あるJSNP Excellent Presentation Award for CINP2024を受賞させていただきました、大変光栄に存じます。重ねて感謝申し上げます。

私の仕事は、ニコチン性アセチルコリン受容体(nAChR)を介した認知記憶調節機構の解明を足掛かりに、複雑な認知記憶の神経基盤の、より一層の理解へとつながるような知見を提供することを目的としております。なかでも、注意、記憶に関与する脳領域である内側前頭前野に着目し、行動薬理学的手法や、薬物脳内局所投与、遺伝学的神経活動操作、脳スライスを用いたex vivo電気生理学的手法を駆使することで、物体認知記憶調節機構の分子・神経メカニズムの一端を解明してまいりました。本大会におきましては「The medial prefrontal cortex exerts the nicotine-induced facilitation of object recognition memory encoding and retrieval in mice」の題目で発表させていただきました。今回発表させていただきました内容は研究成果の一部ではございますが、ニコチンによる認知記憶の記録・学習および想起促進作用を駆動する神経メカニズムの一端をご紹介することが叶い、大変嬉しく思います。

平均寿命の延長や出生率の低下などに起因して、超高齢社会を迎える我が国や世界各国におきまして、加齢に伴う疾患の治療法・治療薬の確立や、健康寿命の延長は喫緊の課題であります。今回の受賞を励みに、また恥じることもないよう、CNS領域においてより社会課題や患者様に貢献できるようさらに精進してまいります。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

末筆ではございますが、今回の発表にあたり、終始懇切なるご指導、ご助力をいただきました金沢大学医薬保健研究域薬学系薬理学研究室教授・金田勝幸先生、同研究室 准教授・出山諭司先生、同研究室 助教・西谷直也先生に、謹んで感謝の意を表します。



扇谷 昌宏

旭川医科大学医学部解剖学講座機能形態学分野

研究課題、タイトル

Direct induction of microglia-like cells from human monocytes: A novel cellular tool for translational research of neuropsychiatric disorders

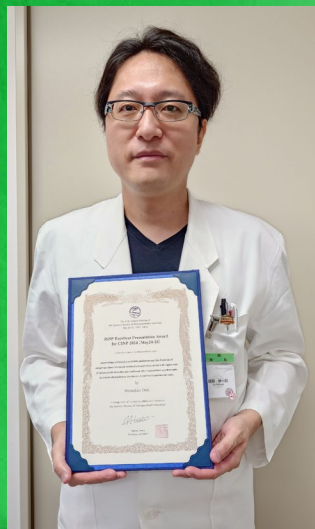
コメント

旭川医科大学の扇谷昌宏と申します。この度は東京で開催されました35th World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum (CINP 2024)での発表の機会をいただきました。また、当該演題に対してJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2024という大変名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。日本（東京）での素晴らしい大会を運営していただいた日本神経精神薬理学会及びCINPの先生方、スタッフの皆様に深く感謝申し上げます。

今回の発表は、ヒト末梢血中の単球から作製したミクログリア様（iMG）細胞を用いた一連の研究成果を報告させていただきました。本研究は、以前に所属しておりました九州大学精神科神経科で約10年前にスタートし、現在も私のライフワークとして続けているものであります。当時より懇切丁寧にご指導いただいております神庭重信先生、加藤隆弘先生には深く感謝申し上げます。

日本神経精神薬理学会は、基礎研究者、医師、薬剤師、臨床心理士（公認心理師）、その他医療従事者、関係企業といった非常に多岐にわたる専門家が参加されている貴重な学会だと感じております。そのため、様々な着眼点からのディスカッションが行われ、毎回良い刺激をいただいております。今回の受賞を励みに、本領域に少しでも貢献できますよう精進して参ります。今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、これまでにご指導いただきました先生方、現所属である機能形態学分野の皆様、研究者仲間、そして研究に参加していただいた方々とその関係者に心より感謝申し上げます。



越智 紳一郎

愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学

研究課題、タイトル

Associations of clozapine available institution and the diagnosis of subgroups about treatment resistant schizophrenia or not with higher rate of antipsychotic monotherapy and lower other concomitant psychotropics in overall schizophrenia treatment: A real-world nationwide study

コメント

2024年5月23日から26日まで東京国際フォーラムで開催されました 第 35回国際神経精神薬理学会 CINP World Congress of Neuropsychopharmacology に参加いたしました。この度は JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2024という栄誉ある賞を授与していただきまして、大変光栄に存じます。誠にありがとうございます。

私自身、久しぶりにCINPに現地参加をすることができ、多くの研究者の先生方と久しぶりに直接お会いして意見交換をすることができ、改めて現地開催のすばらしさを感じることができました。

今回の発表内容としましては、クロザピンが処方可能な施設体制の有無によって、統合失調症の退院時処方にどのような特徴があるかを調査いたしました。その結果、クロザピンの処方体制がある群は、体制がない群よりも、抗精神病薬単剤療法率、他の向精神薬の併用もない抗精神病薬完全単剤療法率とともに有意に高く、これはクロザピンが処方されていた症例をすべて除いた上でも同様の結果でした。さらに退院時に治療抵抗性の有無が記載されていたかどうかで分類した4群では、クロザピンの処方体制がありかつ治療抵抗性の有無の記載がある群のみ、他の3群より抗精神病薬単剤療法率、抗精神病薬完全単剤療法率ともに有意に高く、その他の群間では有意差は認められなかったことが見出されました。近年、臨床ガイドラインの普及・実施のための実装戦略として、施設の文化構築だけでもガイドラインの実施における要因の一つとして有効であることなどが報告されており、本研究の結果から、各施設がCLZの処方体制を構築し、その上で、さらに治療抵抗性の有無の診断を検討することが、文化の構築をもたらし、多剤併用療法を減らすことにつながる可能性があります。このようなガイドラインに基づく施設の文化の構築は、実施戦略のアプローチとして、他の精神医学問題にも応用できるかもしれません。

最後になりますが、今回の受賞にあたり、御指導・御鞭撻を賜りました先生方、および学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。この受賞を励みに更に神経精神薬理領域の発展に貢献できるよう尽力していきたいと思っております。今後とも御指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。



越智 翔平

東北大学大学院医学系研究科附属創生応用医学研究
センター発生発達神経科学分野

研究課題、タイトル

Automated analysis of rodent behavior using
IntelliProfiller: a potential tool for studying
neurodevelopmental disorder-like model mice

コメント

2024年5月23日-26日に東京国際フォーラムで開催された第 35回国際神経精神薬理学会（35th World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum）での発表に対し、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2024に選出頂き、大変光栄に存じます。

私は神経発達障害の病因・病態の理解を目指し、モデルマウスを用いた行動解析システムの開発に取り組んでいます。これまでの齧歯類の行動解析は、主に単一個体あるいはペア（二個体）を対象としており、セミナチュラルな集団環境下でのマウスの社会行動に焦点を当てた研究はほとんど行われていませんでした。私たちは、RFID（無線式IDタグ）を用いた個体トラッキング技術を活用し、新規に大集団のマウスの行動動態を同時に自動追跡するシステム「インテリプロファイラー（未発表）」を開発しました。このシステムにより、神経発達障害モデルマウスが示す行動の大規模データが得られつつあります。今後は、数理情報学的解析を通じて、これまで見過ごされていた神経発達障害モデルマウスの行動特性を精緻に捉えることを目指します。

国際神経薬理学会は、今回が初参加になりますが、世界中の最先端の研究に携わる研究者と活発な議論を行うことができました。また、神経精神薬理学の基礎研究および臨床研究の最新動向についても学ぶことができ、大変有意義な機会となりました。

最後になりますが、今回の受賞にあたり、御指導・ご鞭撻を賜りました大隅典子教授をはじめ、多くの先生方、研究室の皆様および学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。この受賞を励みに、今後も神経精神薬理学領域の発展に貢献できるよう、一層研究に邁進してまいります。



小野 亜美

広島大学大学院医系科学研究科

研究課題、タイトル

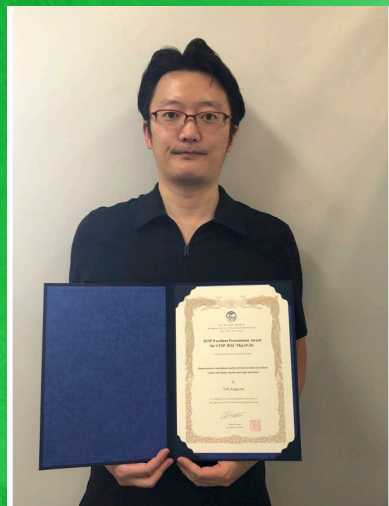
Overexpression of vasoactive intestinal peptide receptor 2 in neurons causes abnormal dendritic morphology in the prefrontal cortex and cognitive impairment

コメント

この度、2024年5月23日から26日に開催されましたCINP 35th WORLD CONGRESS (World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum：国際神経精神薬理学会)・第54回日本神経精神薬理学会・第34回日本臨床精神神経薬理学会に参加・発表をさせていただきました。同時に、JSNP Excellent Presentation Award for CINPを賜り、誠にありがとうございます。このような素晴らしい賞をいただいたことを大変光栄に存じます。また、現地で初めてCINP/JSNPに参加し、諸先生方の講演、ポスター発表を通じ最先端の研究に触れることができ、大変貴重な機会となりました。

私は統合失調症の発症脆弱因子としての血管作動性腸管ペプチド受容体2 (VIPR2)の役割を解明することをテーマに研究を行っています。統合失調症はあらゆる社会と地理的地域にみられ、全世界的にその発症率は約1%と高い状況です。しかし、その発症メカニズムや治療・寛解機構の詳細は不明であり、薬物療法も限定的であるのが現状です。これまでの大規模なゲノムワイド関連解析によりVIPR2の遺伝子重複が、統合失調症の発症に大きく関与することが明らかになってきました。本発表では、統合失調症におけるVIPR2増加の病態的役割を解明する目的で、神経細胞特異的にヒトVIPR2を過剰発現する新規のトランスジェニック (TG) マウスを開発し、その行動学的解析と神経細胞の形態学的解析を行いました。作製したTGマウスは、ヒトVIPR2を神経細胞において過剰発現しているとともに、健康なマウスと比較して認知機能障害を示し、大脳皮質神経細胞の細胞体の縮小と樹状突起の減少が認められました。またRNA-seq解析から、TGマウスの大脳皮質前頭前野において、認知機能障害や神経細胞の形態学的変化と関連する複数の因子を同定しました。以上の結果より、VIPR2の過剰発現は、大脳皮質の神経細胞の形態変化を引き起こし、統合失調症の主症状の一つである認知機能障害につながる可能性が示されました。今後、これらが明らかになることで、これらの研究成果をもとに、VIPR2を標的とした統合失調症の新しい治療薬の開発につなげていきたいと考えています。

最後になりましたが、ご指導いただきました広島大学大学院医系科学研究科(歯)細胞分子薬理学教室の吾郷由希夫教授、歯科矯正学教室の谷本幸太郎教授に深く感謝申し上げます。



影山 祐紀

大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学

研究課題、タイトル

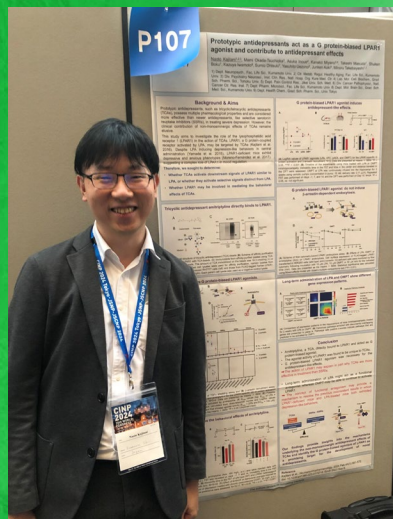
Human plasma transcriptome analysis in brain-enriched extracellular vesicles with bipolar disorder and major depression

コメント

大阪公立大学大学院 医学研究科 神経精神医学の影山祐紀と申します。この度はJSNP Excellent Presentation Award for CINP2024という大変素晴らしい賞を頂き、心より御礼申し上げます。この場をお借りして、研究活動を指導してくださった先生方、選考委員の先生方および学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

対象演題につきまして2024年 5月 23 ～ 26 日に東京で開催されましたCINP2024 において口演をさせていただきました。私はヒト検体及びモデルマウスを用いて、うつ病と双極症を区別するバイオマーカーの研究などを行っています。今回は「血液中に存在する脳由来細胞外小胞中のトランスクリプトーム情報はうつ病と双極症を区別するバイオマーカーとなりうる」という内容の発表を行いました。今後更なる研究を重ねて、うつ病の中から、潜在的な双極症を掬い上げられるようなマーカーを開発できればと考えています。

今回の受賞を励みに、さらに研究を進め、神経精神薬理学の発展に貢献できるよう精進して参ります。今後ともご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。



梶谷 直人

熊本大学大学院生命科学研究部附属健康長寿代謝制御研究センター

研究課題、タイトル

Prototypic antidepressants act as a G protein-biased LPAR1 agonist and contribute to antidepressant effects

コメント

熊本大学大学院生命科学研究部附属健康長寿代謝制御研究センターの梶谷直人と申します。

CINP2024での発表において、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2024を受賞したことは大変名誉なことで、深く感謝しております。この場を借りて、選考委員の先生方、そして学会関係者の皆様に心からの感謝の意を表します。

今回、私は「Prototypic antidepressants act as a G protein-biased LPAR1 agonist and contribute to antidepressant effects」というタイトルでポスター発表を行いました。1950年代に開発された三環系抗うつ薬（TCA）は、副作用が少なく使いやすい選択的セロトニン再取り込み阻害薬（SSRI）と比べて、重症例においては治療効果が高いとされています。そこで、私たちはTCAのモノアミン以外の作用機序を探索し、TCAがリゾホスファチジン酸（LPA）1受容体のGタンパク質バイアス型アゴニストとして作用することを明らかにしました。この薬理作用が、TCAがSSRIよりも治療効果が高い理由を説明する一つの可能性として提示できました。この発表を通じて、国内外の先生方とのディスカッションができ、今後の研究の方向性を決定するのに非常に有益な経験となりました。

最後に、今回の受賞に際し、指導・鞭撻を賜りました竹林実教授をはじめとする指導教員の先生方、そして本研究に関わった皆様に心から感謝申し上げます。これからも神経精神薬理領域の発展に貢献できるよう、引き続き努力して参ります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



北川 航平

大阪大学薬学研究科神経薬理学分野

研究課題、タイトル

POGZ mutant mouse model of autism spectrum disorder shows abnormal neural activity in the anterior cingulate cortex during social behavior

コメント

この度、2024年5月23日から26日に開催されました第35回国際神経精神薬理学会（35th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology: CINP）にて発表いたしました、大阪大学薬学研究科 神経薬理学分野の北川航平と申します。

今回私は、独自に作成した自閉症モデルマウスであるPOGZ変異マウスにおける社会性行動中の神経活動解析の結果を報告いたしました。この発表に対し、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2024という栄誉ある賞をいただくことができ、大変光栄に思います。この場をお借りして、学会関係者の皆様、および日頃よりご指導ご鞭撻いただいております研究室の同僚、先生方に深く御礼申し上げます。

本大会のポスター発表の現場では、国内外の先生方と有意義な議論を交わす、大変貴重な経験ができました。また、各国より来日された最先端の研究を行う研究者の方々の発表を聞き、基礎・臨床の各領域における最新の知見を学ぶことができたほか、国内の名だたる先生方の教育公演にも大きく刺激を受けました。特に創薬を志向した発表を聞く中で、創薬研究者になるという自身の目標を再確認することができました。今回の経験を励みに、今後も自身のテーマである自閉症の病態解析を遂行し、神経精神薬理領域の発展への貢献を目指します。



鈴木 清流

富山大学大学院大学院総合医薬学研究科総合医薬学
専攻基礎薬学プログラム薬物治療学

研究課題、タイトル

Recovery effects of clemastine, a myelination-promoting agent, on the depression-like behaviors-induced by Teneurin-4 knock-down of the hippocampus in mice

コメント

この度、2024年5月に開催された35th World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicumに参加し、発表を行いました。この発表に対し、栄えあるJSNP Excellent Presentation Award for CINPを受賞することができ、大変光栄に存じます。この場をお借りして、選考委員の先生方および学会関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

今回、初めて国際学会に参加し、著名な先生方の講演を聴いて最先端の研究に触れ、非常に価値のある経験を積むことができました。また、自身のポスター発表では、多様な研究領域の先生方と活発な議論を交わすことができました。その中で、実験系や実験方針についてさまざまな視点からのフィードバックをいただき、改めて自分の実験テーマと向き合う貴重な経験となりました。

私は「うつ病の新規原因遺伝子の発見」を目的として研究を行ってきました。うつ病患者数は年々増加しており、さらにうつ病患者の約3割が既存の抗うつ薬に対して抵抗性を示すとされており、新規抗うつ薬の開発は急務です。うつ病患者の海馬において白質の体積が減少していることが報告されていますが、白質の体積低下の1つの原因となる脱髄がうつ病を誘発する詳細なメカニズムは明らかにされていません。私が発表した研究では髄鞘形成に関与するタンパク質に着目し、マウスの海馬における当該分子のノックダウンがうつ様行動を誘発することを明らかにしました。本研究がうつ病の新たな治療戦略に繋がることを願っております。

今回の受賞を励みに、さらに研究を進め、神経精神薬理学の発展に貢献できるよう精進して参ります。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます



田中 里奈子

名古屋大学医学系研究科医療薬学講座

研究課題、タイトル

A Rho-kinase 2 selective inhibitor KD025 ameliorates schizophrenia-like behaviors in MK-801-treated mice

コメント

2024年5月23日～26日に東京国際フォーラムで開催された35th World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum (CINP 2024)に参加しました。JSNP Excellent Presentation Awardを受賞させていただき、大変光栄に思っております。この場をお借りして、共著の先生方、研究室員のお力添えに深く感謝申し上げます。

私は、統合失調症の既存薬とは全く新しい治療標的としてRho-kinase 2に着目して創薬研究を行っております。本学会では、Rho-kinase 2阻害剤の抗精神病効果をマウスモデルで評価した研究成果を報告させていただきました。自分の中での今回の学会の成果は、国際学会で初めての口頭発表に挑戦したことです。東京開催ということで、「座長は日本人かな？」と淡い期待を抱いていましたが、座長はMonash大学のDr. Rachel A. Hillで大変緊張しました。しかし、海外の研究者に自分の研究を注目していただける機会を得ることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。また、コロナ禍から開けてコミュニケーションが自由に取れる学会で多国籍の研究者と交流を深めることができとても楽しかったです。今回の学会でもう一つ印象に残ったのが、Gala Dinner Cruiseでした。一人席が離れてしまい不安でいっぱいでしたが、一生懸命話したことでイタリア人の研究者と友達になることができました。何事もやってみることが大事だということを感じました。

今回いただいた賞を励みに、神経精神薬理学分野の発展に貢献できるようより一層精進いたします。これからもどうぞよろしくお願いいたします。



徳竹 伯洸

富山大学医学薬学教育部薬科学専攻薬物治療学研究室

研究課題、タイトル

Roles of cannabinoid type 1 receptors in the mice prefrontal cortex for object location memory

コメント

このたび、2024年5月に開催された35th World Congress Collegium internationale Neuro-psychopharmacologyに参加・発表を行いました。本発表に対し、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2024をという大変栄誉のある賞をいただくことができ、大変光栄に存じます。この場をお借りして、選考委員の先生方および学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

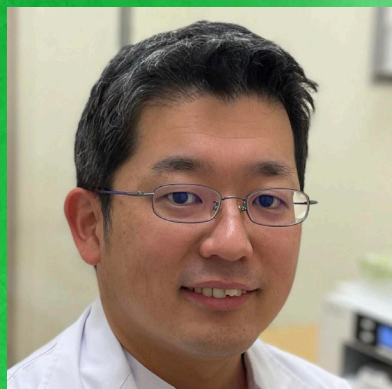
今回は東京での開催であったことから、著名な先生方の講演を実際にお聞きし、ポスター発表を1つ1つじっくり見ることと最先端の研究を知ることができ、非常に良い機会となりました。また、私自身のポスター発表では研究について多くの研究者の方々とディスカッションができ、貴重な経験を得ることができました。

私は、これまで「大麻による記憶障害の機序解明および治療ターゲットの探索」を目的とし、研究を行ってきました。大麻は世界中で使用されている依存性物質です。近年、世界的には、治療目的での大麻の使用もなされており、慢性疼痛や痙攣に効果があると報告されています。しかし、大麻は中枢神経系に作用し、記憶障害などの精神病様症状を誘発することが多く報告されています。これらの症状には、脳内に高発現しているカンナビノイド1型受容体（CB1R）が関与していると考えられていますが、その詳細なメカニズムは明らかにされていません。本研究では、特定の脳領域に存在するCB1Rに着目し、記憶障害のメカニズムを明らかにすることができました。本研究が、今後社会的な普及が予想される大麻使用障害研究の出発点となり、基礎的知見を開拓に繋がればと考えております。

今回の受賞を励みに、さらに研究を進め、神経精神薬理学の発展に貢献できるよう精進して参ります。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

徳満 敬大

獨協医科大学精神神経医学講座



研究課題、タイトル

Predictors of psychiatric hospitalization among outpatients with bipolar disorder in the real-world clinical setting

コメント

この度、CINP2024において、JSNP Excellent Presentation Award for CINPを受賞しました。本研究は、日本精神神経科診療所協会と、日本臨床精神神経薬理学会のメンバーによる合同プロジェクト（MUSUBI）の成果のひとつです。この場を借りてお礼申し上げるとともに、内容について簡単にご紹介致します。

双極性障害は躁病エピソードと抑うつエピソードを繰り返す難治性の精神疾患です。再発を繰り返す度に、社会機能が低下することが知られているため、外来診療では症状再燃による入院を予防し、寛解を維持することが重要です。しかし、リアルワールドにおける双極性障害の入院予測因子は、不明な点が多いことが課題でした。私たちは、MUSUBIのデータを用いて、ベースラインの臨床的特徴と、その後1年間の入院発生の有無について多変量解析を行い、双極性障害患者の入院予測因子を検討しました。研究では、外来治療中の双極性障害患者について、ベースラインから1年間に入院が発生した割合は3.06%であることが明らかとなりました。次に、1年間の入院発生に関して多変量解析を行ったところ、ベースラインにおける低い全般的機能(GAF)スコア、双極I型障害、無職、物質使用障害の合併および躁病相が、統計的に有意な入院発生の予測因子であることが判明しました。特にベースラインにおけるGAFスコアは、低ければ低いほど、その後の入院リスクが高いことが明らかとなりました。私たちの研究によって、双極性障害外来患者さんの入院発生予測因子として、ベースラインのGAFスコアが重要であることが浮き彫りとなりました。一方で、今回明らかとなった予測因子が、それぞれGAFスコアに影響を与えることも知られています。

このため、物質使用障害および就労に焦点を当てた支援や、躁病エピソードの治療を意識した治療が、双極性障害患者の入院予防と寛解維持につながる可能性があると思われました。MUSUBIのデータ解析により、本邦における双極性障害患者さんの転帰に関する重要なリアルワールドエビデンスが得られました。この度は、貴重なデータの解析ならびに発表の機会を賜り、ありがとうございました。



西谷 直也

金沢大学医薬保健学研究域薬学系薬理学研究室

研究課題、タイトル

Neural activity changes via dopamine D1 receptor stimulation in the nucleus accumbens modulate motivation for wheel running in mice

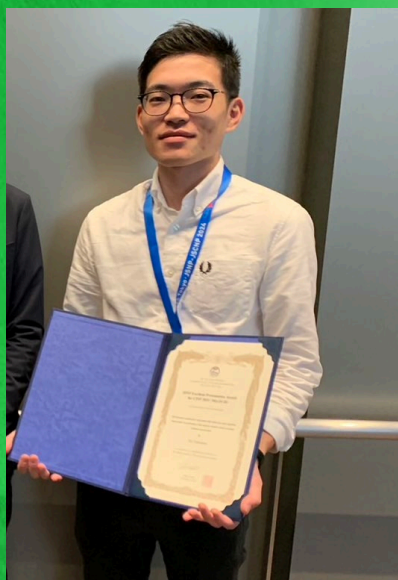
コメント

この度、2024年5月23～26日に開催された第35回国際神経精神薬理学会(35th World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum; CINP2024)に参加し、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2024を受賞させていただきました。このような名誉ある賞を賜りましたこと大変光栄に存じます。選考委員の先生方および学会関係者の皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。また、ご指導いただきました先生方に深く御礼申し上げます。

国際神経精神薬理学会は今回が初めての参加でしたが、世界中の研究者による基礎から臨床まで幅広い発表を拝聴させていただくことで、知識の幅が広がったとともに大変刺激を受けました。

私は行動嗜癖の神経メカニズムを解明すべく研究を行っております。行動嗜癖はインターネットやゲームなど特定の行動に自制できないほどのめり込んでしまう状態を指します。今回発表させていただいた内容は、マウスの輪回し行動を行動嗜癖モデルとして、オペラント課題と組み合わせることで輪回し行動への欲求を定量評価し、その欲求が生じる神経メカニズムの解明を試みるというものでした。ファイバーフォトメトリー法による神経活動およびドパミン遊離量の観察と薬理学的手法を組み合わせた解析を行った結果、側坐核でのドパミン遊離量が増加し、ドパミンD1受容体の活性化を介して神経活動が低下することが輪回し行動への欲求発現に重要であることが明らかになりました。ポスター発表では、海外の研究者とのディスカッションなど普段できない経験ができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

今回の受賞を励みに、今後の神経精神薬理学分野の発展に貢献できるよう研究を進めて参りたいと思います。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



横山 玲

大阪大学大学院薬学研究科神経薬理学分野

研究課題、タイトル

(R)-ketamine ameliorates depression-like behaviors and cognitive impairment via activation of the anterior insular cortex in social isolation-reared mice

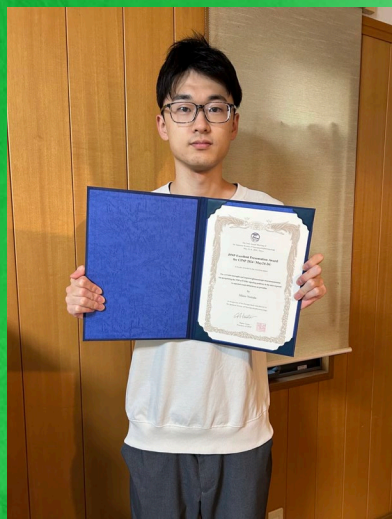
コメント

この度、CINP 2024 Tokyo Congressに参加し、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINPという栄誉ある賞をいただくことができ、大変光栄に存じます。

今回、私は「社会的隔離によるうつ様症状や認知機能障害に対する(R)-ketamineの治療効果とその神経メカニズム」についてポスター発表を行いました。幼若期における社会的隔離は、ヒトやマウスに共通して、精神的成熟に影響し、うつ病をはじめとする様々な精神疾患の原因となる可能性があります。また、ketamineおよびその光学異性体である(S)-ketamineは、うつ病に対する画期的治療薬として知られています。私は、特に光学異性体(R)-ketamineの薬効に着目し、隔離飼育マウスの精神症状に対する(R)-ketamineの治療メカニズムを明らかにすることを目標に、種々の神経活動の計測や操作を用いた解析に取り組みました。その結果、うつ様症状や認知機能障害に対する改善効果に、前部島皮質の活性化が関わることを見いだすことができました。

CINP 2024では、世界各国の研究者の発表や活発な議論を通して、自身の研究の新たな展開につながる貴重な知見を得ることができ、刺激的かつ有意義なものとなりました。また、今回発表した成果が、今後の精神疾患の治療メカニズムの理解に少しでも貢献できれば大変うれしく思います。

最後になりましたが、受賞にあたり、学会関係者の皆様、並びにご指導ご鞭撻を賜りました先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。今回の受賞を励みに、今後の神経精神薬理学の発展に貢献できるよう精進して参ります。



吉田 樹生

名城大学薬学部病態解析学Ⅰ

研究課題、タイトル

The activated microglia and impaired glutamatergic neurotransmission via upregulating the TNF- α /TNFR1 signaling pathway in the mice exposed to repeated social defeat stress as juveniles

コメント

2024年5月23日から26日にかけて開催されました第35回国際神経精神薬理学会（35th World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychoopharmacologim：CINP2024）に参加・発表させていただきました。神経精神薬理学分野の国際大会への参加は、2022年に行われた33rd CINP Hybrid World Congress of Neuropsychopharmacology以来2年ぶりとなりました。前回は、新型コロナウイルス感染症による影響で現地での参加はできませんでした。今大会では世界各国の神経精神薬理学者が東京に集い、いずれのセッションでも活発な議論が繰り広げられておりました。拝聴させていただいた研究内容はどれも興味深く、また、私の発表に対して多くのご意見やコメントをいただき、大変有意義な4日間を過ごすことができました。

私は、幼少期における虐待やいじめなどの心理社会的ストレスへの曝露による若年性ストレス関連精神疾患の病態を脳内炎症とグルタミン酸作動性神経伝達の観点から研究を行っております。この度、光栄にもJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2024をいただくことができました。本研究は、はじめて研究に触れた7年前から今日まで継続して行っていたものであり、7年間の努力が評価されたことを大変喜ばしく思います。

最後になりましたが、野田幸裕教授をはじめ御指導・御鞭撻を賜りました先生方、本研究にご協力いただきました皆様、学会関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。来年度からは新天地にて新たに研究を始めることになりましたが、神経精神薬理学分野の更なる発展に貢献できるよう、日々精進していく所存です。今後とも御指導・御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。



吉見 陽

名城大学薬学部病態解析学I

研究課題、タイトル

Spatial brain proteomic analysis in a clozapine-treated schizophrenia-like mouse model

コメント

この度、2024年5月23日から26日に東京国際フォーラムで開催されました第35回国際神経精神薬理学会世界大会（35th The International College of Neuropsychopharmacology (CINP) World Congress 2024 : CINP2024）に参加いたしました。本大会では、神経薬理学領域に関わる研究者、医療従事者、製薬企業関係者などが一堂に会し、中枢神経薬の開発と適正使用に向けて最先端の基礎・臨床研究の推進や産官学連携の実践に関するシンポジウム・一般演題にて活発な議論が行われていました。

神経精神薬理学に関わる国際学会への参加は、2019年の第6回アジア神経精神薬理学会大会（6th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology : AsCNP2019）以来であり、コロナ禍以降、国内外の参加者と直接顔を合わせて交流することができ、非常に有意義な機会となりました。ポスター発表では、「Spatial brain proteomic analysis in a clozapine-treated schizophrenia-like mouse model」というタイトルで発表させていただきました。高次脳機能に関わる脳組織中のタンパク質の発現プロファイルを網羅的に取得し、共通性と特異性を明らかにして病態関連分子や治療標的を探索しています。将来的には遺伝子発現解析・代謝物解析と関連付けたマルチオミクス解析を進める予定です。同様の動物モデルを取り扱っている国内外の研究者から互いの研究に関する意見を交換し、今後の研究課題の克服や新たな研究計画の立案に向けて非常に有意義な時間を過ごすことができました。

日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2024という大変栄誉ある賞を授かることになり、ご指導賜りました先生方、学会関係者の皆様に心より御礼申し上げます。今回の受賞を励みに、神経精神薬理学の発展に貢献するべく精進してまいります。今後ともご指導・ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。